
クロッキー ~ 幸せな 1 日 ~

coyuki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クロツキー〜幸せな1日〜

【Nコード】

N5403H

【作者名】

coyuki

【あらすじ】

黒地に黄色の文字の車のナンバープレート。それを3台みかけると、その日1日幸せになれる。この物語の主人公は友だちからそんな話を聞いて、半信半疑な状態だったけど、3台探してみる。そんな主人公が迎える結末は…！？

「あ、クロツキー！」

「ほんとだ！2台目！」

初夏7月の帰り道。友だちの歩海アユミと美来ミライが郵便局の軽自動車を見て騒ぐ。

「…何？クロツキーって。」

私がそう聞くと、2人は目を見開いた。

「えっ、メグ、知らないの？クロツキー」

「黒地に黄色いナンバーの、車のナンバープレート！3台見つけると、その日1日幸せになれるんだってえ！」

おまじない好きの美来が頬を両手で包んで飛び跳ねる。

信号は、赤。車の邪魔にはならなそうだ。

「…その日1日？」

「あ、でもさっ、願い事すると叶うっていう説もあるらしいよ！私だったら、絶対県総体優勝するって願うし！」

歩海は笑う。

歩海はバスケット部の1年生で、学年唯一のレギュラー。

プレッシャーもあるせいか、誰よりもいいプレーをすることを日々願う、トレーニングや練習に励んでいるらしい。

レギュラー落ちした先輩からは妬みの視線が歩海に向けられるけど…歩海は、めげない。そんな強さに、密かに憧れてる。

「私は、大翔君と両想い…かなっ」

また跳ねる美来。

大翔ヒロトってというのは、美来と同中出身の男子。

高校に入学してから、一度も学校に来ていないらしい。

美来は毎日のように、「大翔君が来ないんなら海宮高校受けた意味ないしい！」と嘆いている…

私は海宮中学校出身で大翔って人と同中出身じゃないけど…私的に

完全100%、不登校だと思っただけで、あえて言わないでおく。ていうか、その日1日限りの幸せだったら、1日しか両想いになれないんじゃない？美来。

「んで、メグは？」

2人がハモツて私に聞く。

「…とりあえず、成績の1位温存…かな。」

「え〜っ！つまんなあい！メグ、好きな人とかいないのお〜？」

「いないよ。」

さらっつと答えるけど…ほんとはいる。

でも、冷やかされるのが怖くて、打ち明けていないんだ。

「っつて、あっ！クロッキー3台目！」

車道の信号が赤になり、止まった車の中で2人がクロッキーを見つめる。

…あ、ほんとだ。黒地に黄色いナンバー。〒という記号がついてて…やっぱ、郵便局マークだった。

「お願い事、お願い事っ！」

歩行者側の信号が青になるけど、クロッキーに向かって手を合わせてお願い事をする2人…

クロッキーの運転手は、少しキョドツてた。

「歩海、美来っ！いくよっ！」

まだお願い事をしてる歩海と美来を掴み、点滅してる反対側の信号に向かつて猛ダッシュした。

クロッキー…か。おもしろそうだな。

翌日、朝。

私もクロッキーを探すべく、登校中に車道側ばかりを見る。

…でも、なかなかクロッキーは見つからない。

ま、しょうがないか。珍しくなきや、意味ないしね。

結局、今朝は1台しかクロッキーを見つけれなかった。

「恵夢！」

後方から、声が聞こえて振り返る。

「拓海先輩！おはようございます！」

自然とワントーン声が高くなって、テンションも上がった。

「おはよ！今日、昼休みに生徒会議室集合だから、井坂にも言っ
いて！」

「あ、はい。分かりました！」

そう答えると、子どもっぽい笑顔を見せる先輩。

彼が、私の好きな人。小原拓海先輩。同じ生徒会役員だ。

ちなみに私の名前はおばあちゃんがつけたらしいので、「恵」が旧
字体の「恵」ってなってる。

生徒会役員が一体となるため、名前で呼び合え！という先生からの
命令で、拓海先輩って呼ばせてもらってる。

名前だし、先輩付けでもいーよね？

「ていうか恵夢の髪って、めっちゃサラサラ！ストパーとかあてて
る？」

いきなり、拓海先輩が私の髪に触れてくる。

一気に顔が熱くなり、慌てて俯いた。

「あてて…ないですけど、親の地毛がまっすぐだから、遺伝したん
だと思います！」

「遺伝かあ。いいなあ。俺、結構クセ毛。朝起きたときとかヤバい
し！じゃっ、俺、先生に呼ばれてっから！」

ニカツと笑って、拓海先輩が去って行った。

顔が赤いこと、悟られてない…よね？

それから、生徒会本部役員との話し合いがあって、5・6時限目の
休み時間も話し合い…

「あゝ、今日もクロッキー3台見つかるといいなあ！」

6時。歩海と美来と下校する時間になった。

2人と同じように、私も車道側をガン見しながら帰る。

今朝の1台はカウントせず、また最初からスタート、って形で始めた。

「見つからないなあ。クロッキー…」

歩海と美来はもうお疲れモード。

私も、ビュンビュン走る車をガン見してて…疲れた。

そのせいか、なんだか暑い。

「ね、サーティーツー寄っていかない？暑いしアイス食べよーよ。」

「

「あ、いいね！私も暑かったあ！」

「私はダイエットしてるからパスる〜」

2人の了解(?)を得たところで、横断歩道を渡ったすぐの所にある、サーティーツーに向かう。

…と、その時、見つけた。

「…あつ！クロッキー、見つけたっ！」

1台、隅っこに駐車してあるクロッキー。

ちようど私の声とトラックの走行音がリンクしたためか…歩海と美来には伝わってない。

…ま、いつか。

「ふは〜！ウマツ！歩海、一口ならあげてもいいよあ？」

「いや、ほんといいつて！マジ体重ヤバいし！」

アイスを押し付けようとする美来と拒む歩海。

そんな2人を見ながら、2段重ねのアイスにのってるクリームを食べた。

美来はまじない部唯一の1年生メンバー。

歩海はバスケット部で唯一の1年生レギュラー。

そして私は、1年生の中で男女各1名しか選ばれない、『生徒生活及び生徒関係調整科』という名目の生徒会本部役員の一員…

ちなみに『生徒生活及び生徒関係調整科』というのは、学年内で起

こつた生徒同士のいざこざを修正させる、という役目を担ってる。その科に入るには、『強い正義感・学年10番以内の優秀かつ良好な成績・生徒からの信頼』この3つが揃ってないと入れないらしい。3人とも、普通の女子高生なのに、結構スゴいなあ。と度々思う。

サーテーターから出て、再び車道を見ながら帰路を辿った。

「あつ！1台目発見っ！」

美来の声と指先を辿って、私にとって2台目のクロツキーを見る。

「あと2台かあゝ。過酷っ！」

歩海は一層目を見開いて探してる。

私は…残り1台。

…2分後ぐらいかに、前方からやって来たクロツキーの存在に気づいた。

「……………あつ！」

声をあげ、3台目のクロツキーを見る。

そしてすぐさま、お願い事をした。

…それは、成績1位温存…じゃなくって。

“ 拓海先輩と、両想いになれますように。 ”

「お願いしちゃったよ〜」

帰宅し、すぐにベッドにダイブして赤い顔を枕に埋める。

叶うといいな……

って私、実は超乙女じゃん??

なんかハズい…でも、なんか嬉しい。

次の日。いつも通り学校へと向かった。

商店街の中を歩いていくんだけど…その商店街で、見知った顔を見た。

「あれ？西院^{サイ}さん？咲良ちゃんだよな？」

同じ学年の、西院咲良。頭にリボンつけてる3人組：通称リボン族の1人。

黒いニット帽子を被ってる男の子に向かって笑いかけている。

「咲良ちゃん！」

大声で呼ぶと、咲良ちゃんは気づいて私の方を見た。

「あ、恵夢ちゃん…だよな？」

「うん。どうしたの？学校は？」

「あゝ、今日サボるう！彼氏とデートなんだあ」

そう言い、彼と腕を組む咲良ちゃん。

彼はというと…

「彼氏じゃねえし。」

ボソツと冷たく言い放ち、そっぽを向いていた。

あれ？照れてんのかな？それとも咲良ちゃんの思い込み？

まあ、どっちでもいいけど…

「へえ…彼氏、なんて名前？」

「大翔だよん ね〜大翔っ！」

「…だからなんなんだよ。」

へえ。大翔って名前なんだ。

…ん？どっかで聞いた気が…

“「私は、大翔君と両想い…かなっ”

美来の言葉を思い出す。

「えっ、もしかして…」

あの大翔って人が、この人！？

驚いて、目の前にいる黒いニット帽子を被った彼を凝視する。

「…何ですか。」

眉をしかめた無愛想な顔。低く冷たい口調…やっぱ同名？

美来なら、軽そうなギャル男を好みそうなんだけど…（失礼。）

まあ、この大翔って人もかなりのイケメンだけどね。

「…いや、なんでもない。んじゃ、楽しんでね！」

「ありがとお恵夢ちゃん」
その2人と別れ、私は学校へと急いだ。

…うん。大体さ、おサボリデートなんて同じ高校の人としかできないはずだし…

しかもあんなに顔綺麗だったら、不登校なんてなるはずないし。

「恵夢っ！」

「わっ」

悶々（もんもん）と考えてて、目の前から近づいてきていたらしい拓海先輩の存在に気づかなかった。

「おはようございます、拓海先輩。」

「おはよっ。で、朝っぱらからいきなりで悪いんだけどさ、放課後ちよっと付き合ってくんない？」

…え？

いきなりのお誘いに、硬直する。

「あ、変な意味じゃないから！んじゃ、ヨロシク！！」

それだけ言って私の肩を叩き、拓海先輩は2年教棟へと走っていった。

…これって…

「デートッ!？」

火照る肩を抑えて、叫んだ。

いや、デートじゃないけど……これってデートに等しくない!？

…放課後が待ちきれないし!

午前中の授業。昼休み。午後の授業…ずっと私はソワソワしてた。

「メグ…。どーしたの??落ち着こうよ!」

「え?落ち着いてるよ」

…だけど、顔はニヤケっぱなし。

だつてさ、放課後付き合つてって言われたんだよ!デートっしょ、

これは!…!!

…この嬉しさを誰かに伝えたいけど…伝えれない。このもどかしさが、逆に私のテンションを上げさせる。
やっぱクロッキー3台みたからかなあ…

…

いよいよ、待ちに待った放課後…

「恵夢っ！」

校門で待つてると、後ろから拓海先輩がやって来た。

「拓海先輩、どこ行くんですか？」

冷静を装って、笑顔で先輩に聞く。

「んつと、商店街の中で、アクセ系で恵夢がオススメするところ！」

…私がオススメするところ??

「アクセ系？」

「…ら、来週、妹の誕生日でさ、プレゼント選ぶにも俺男だし、女の趣味って分かんないから…恵夢なら分かるかなって思って。」

い、妹想いだなあ、先輩…っ！

私は先輩の妹想いなところに感激しまくりだった。

「そうなんですか。めっちゃ可愛いお店知ってます！」

「マジで!? さっすが恵夢! …てか俺、シスコンだつて思わない？」

「思いませんよ〜！」

「よかった！」

パツと笑顔になる拓海先輩。

あゝ、ほんと、この笑顔好きだなあ…

幸せの海にどっぷり浸かってた私は、気づかなかつた。

拓海先輩が、辺りをしきりにキョロキョロしてることに…

商店街。同じ制服の人や違う制服の人がたくさん行き交っていた。

「ここですー！」

着いた店は、「LOVE・MAGIC」っていうアクセ屋さん。

結構可愛い系やカッコいい系のアクセが揃ってる、オススメの店。

「…な〜惠夢〜。女って誕プレ、どっこののが欲しい?」

リボンやブレスレットを見て、拓海先輩が眉をしかめる。

…本当に妹思いなんだなあ。

「妹さんの名前、なんていうんですか?」

「えと…優海だよ。」

優海ちゃん…かあ。海つながりだね。

「じゃあ、優海ちゃんは体の部分で言うところの魅力ですか?」

「ん〜っと…手首、かな。」

「じゃあ、ブレスレットがいいですよ。たとえば、このリボンがついたのとか可愛いし、チェーンはカッコいいし…」

「あ、なるほど〜。」

そう呟き、拓海先輩は可愛い系のブレスレットを次から次へと持ってきて来て、私の前に並べる。

「ん〜…どれがいちばん可愛いかな…」

なんて、真剣に考えてる横顔。

時々緩む笑顔。

見惚れてしまった。

…なんか、もう、ずっと一緒にいたいな…

…なんて、蕩けたことを考えてると、ケータイが鳴った。

『メグ〜！先帰っちゃうよお?』

美来からのメール。

『ごめんっ！急用できたから先帰るう…』

すぐに返信して、ケータイを閉じた。

「な〜惠夢〜。この2つだったらどっちがいいと思う?」

「え?どれですか?」

先輩に呼ばれた私は、ケータイを台の上に置いた。

ブレスレットと、「ネックレスとかあんま持ってなかったかも。」

ということ、ネックレスを購入した拓海先輩は、笑顔で店を出た。
「ありがとな惠夢っ！マジ助かった！」

「いえ、私はアドバイスしただけで何も…」

「それが効いたんだって！あ、あと、これお礼っ！」

そう言い、拓海先輩が投げってきたものをキャッチした。

「…飴玉？」

何種類かの飴玉が入った、1つの可愛い袋。

「そ。惠夢、学年1位頭いいし、生徒会の役員じゃん？だから毎日頭使ってカリカリしてそうだから…たまにはそれ食ってリラックスしてみ？」

「力、カリカリって…それに私、そんなに勉強してませんよ？…でも、ありがとうございます！」

と言いながら、バッグに飴玉を入れた。

…多分、今、人生の中でいちばん幸せ。

「それじゃ、私この道なんで…」

「お、そっか。じゃ〜な！また明日！」

「はい、さようなら！」

名残惜しい気もするけど…笑顔で先輩に手を振った。
先輩も振り返ってくれて…嬉しかった。

「あ〜も〜、ほんと幸せ…」

小さく呟き、帰路を辿る。

…ふと、気づいた。

「…あ。」

…ケータイ忘れたじゃん。私。

たしか、あの台の上に置いて、そのまま…

「ヤバッ。窃盗とかされてなきゃいいけど…」

すぐさま、道を引き返した。

『LOVE・MAGIC』に行き、店員に尋ねると、

「落し物のケータイなら、ここにありますよ。」

そう言われ、ケータイを渡された。

「あ、ありがとうございます！」

「いえいえ。今度からは気をつけてくださいね？」

「はい！」

威勢良く返事し、すぐに『LOVE・MAGIC』を出る。

商店街を出て、ふと左の方向を見ると…拓海先輩がいた。

「あ、拓海先輩……」

…すぐに、気がついてしまった。

拓海先輩の隣に、女の人がいること。

「え、これ、誕プレ？」

誕プレ…じゃあ、あの女の人は妹？

…だよな。背、私よりちっちゃいし…145センチぐらいだよな、たぶん。

「そ。後輩にちよつと付き合ってもらったんだ。」

「え、浮気い？」

「そんなんじゃないよ。それより、やっぱり似合うね。そのブレスレット。」

「えへっ だってたつくくんが選んでくれたんだもん！嬉しい！ありがと〜！」

拓海先輩をたつくくんと呼ぶ、その女の人。

その女の人は拓海先輩の首に腕を回し…キスをした。

「っ……」

思わず物陰に隠れてしゃがむ。

「夏姫、ここ人いるじゃん。」

「いいの〜」

夏姫……優海って名前じゃ、ない。

あのブレスレットとネックレス…夏姫さんにあげる予定だったんですね、拓海先輩。

夏姫さんっていう、彼女に……

…彼女、いたんだ…

気づいた。先輩が、辺りをキョロキョロしてたこと。妹の体の部分で魅力的なところを普通に答えたこと。普通なら、答えるはずないってこと。

選ぶときの真剣な顔…夏姫さんのことを想ってたってこと。選ぶときのふとした笑顔…夏姫さんのことを想ってたってこと。涙が、目に溜まってきた。拭って、見上げる。

柱時計が掲げられていて…6時10分を指していた。

“「えっ、メグ、知らないの？クロッキー」”

“「黒地に黄色いナンバーの、車のナンバープレート！3台見つけると、その日1日幸せになれるんだってえ！」”

その日1日。24時間。

3台目のクロッキーを見てから、今、24時間が経った直後だった。

「その日1日幸せになれる……」

たしかに、今さっきまで幸せだった。

でも、今は……

今は…

「ずっと大好きだよ、夏姫。」

大好きだった拓海先輩の声さえ、切なく私に響く。

昨日見かけた3台のクロッキー。

幸せな時間を、ありがとう。

多分、もう、忘れない。永遠に私の中で繰り返される時間……

…ずっと大好きだよ、拓海先輩。

ねえ、知ってる？

黒地に黄色の文字の車のナンバープレート。

3台見かけると、その日1日だけ、幸せになれるんだって。

…その日1日が過ぎたら、どうなるか分からないけど…

どうかそれ以降の日々も、幸せでありますように。

(後書き)

さりげに『海と想いと君と』に出てくる人物も登場してしまいました
たが…(^^;)

クロッキーは、私が所属する部活の中で流行ってるワード(?)で
す。

ただのジnkクスでしょうけど…もしかしたら、という設定で書いて
みました。

拓海君：罪な男ですね(苦笑)

何故妹の誕プレ、だなんて嘘ついたのかは…ちょっと秘密にしてお
きましょう(笑)

クロッキー…幸せな1日…本作から、このあとがきまで読んでくれ
たあなたに感謝します。ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5403h/>

クロッキー～幸せな1日～

2010年10月20日14時32分発行